

にじ

高知医療センター
武田明雄病院長
深田順一副院長
退任のご挨拶 P2~3

第6回 高知医療センター開院10周年企画
~診療現場の「今」と「これから」~

ペインクリニック科/病理診断科
皮膚科 P4~7

■ 高知医療センター・イベント情報 P 8

3

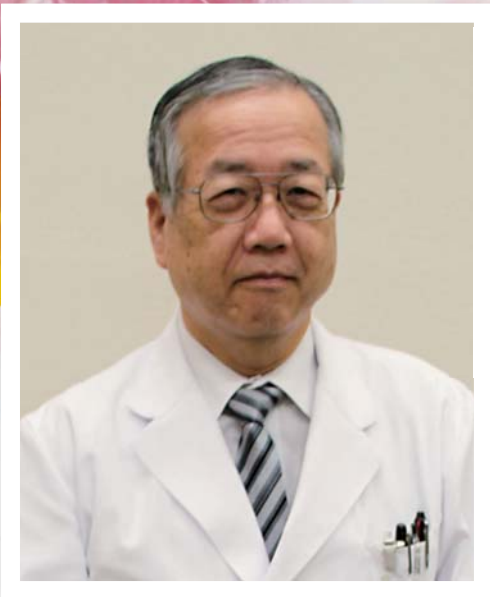
MARCH 2015 Vol.113



今月末で高知医療センターを“卒業”する方々。左上より右回りに、武田明雄病院長、市川理恵眼科科長、町田尚敬ITセンター次長、深田順一副院長、服部暁昌薬剤局長、橋田圭介主任。

高知医療センターの理念 — 医療の主人公は患者さん —

退任の



病院長 武田 明雄

与させていただきました。病院長として県内の地域病院、診療所を訪問した際、昔懐かしい先生がたが地域医療に活躍されているのを拝見し、本当にうれしく思いました。高知医科大学の時に一緒に働いた先生がたが地域の中核病院の病院長になり高知県の医療の最前線で頑張っておられますし、非常におこがましい言い方ですが、その当時教育・指導にあたった学生さんで、高知大学の教授に就任された方もおられます。また、県中、医療センターで指導させていただいた自治医科大学卒業生が、現在高知県の僻地医療の中核を担っておられます。

病院長として仕事をしていく上で、このような先生がたとの関係が非常に役に立っており、高知県の医療になんとか貢献できたのではと思っております。

医師の高齢化、地域的偏在や診療科の偏在が問題となっています。医療センターとしては地域の病院への医師派遣等種々の支援を今後も継続していく所存ですし、地域医療を担っていく若手医師の教育も最重要の責務と考えています。

今後、医療のあらゆる分野で高知県の医療の「要」となるよう最大限の努力をしていきますので、地域の医療機関の皆様がたにはさらなる連携をよろしく願いたします。

この3月末で定年退職するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

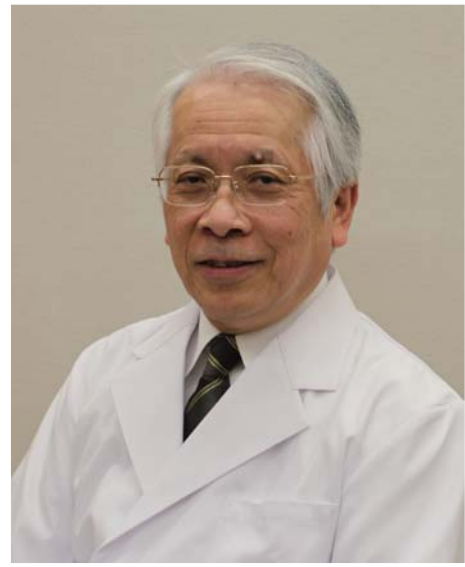
昭和51年に「晴れの国」岡山から高知県立中央病院に麻酔科医として着任して以来、医師生活40年のうち約30年を南国高知で過ごしています。その間、昭和56年高知医科大学開院時に麻酔科講師として着任、10年間に過ごしました。高知県ようやく設立された医科大学ということで県民の期待は大きく、新進気鋭の先生がたと気概に燃えて懸命に働いたことがつい昨日のこのように思い出されます。

平成6年には2度目の高知県立中央病院着任、その後平成17年に高知医療センターに移りました。県立病院と市民病院の統合やPFI等全国初の事業が話題となり、私は手術室運営を任せられ、その準備に忙殺されたことも同様に懐かしく思い出されます。改めて、高知医科大学と高知医療センターという高知県の最も重要な医療機関の創設に関与できたことは、この上ない名誉と感じています。

私は、麻酔科医として医師生活のほとんどを、手術室、集中治療室という病院の中の「穴倉」で過ごしてきました。ところが思いもかけず最後の3年間は病院長として、院内だけでなく高知県全体の地域医療にも関

ご挨拶

副院長 深田 順一



この度、高知医療センター副院長を退任するに当たり、皆さまに一言、ご挨拶を申し上げます。

私の本院での最初の職務は、医師の束ね役としての医療局長、院外との連携を担当する地域医療センター長、それに実臨床では総合診療科科長に代謝・内分泌科医師を兼ねるというものでしたが、翻ってみるに私の中ではこの10年、当初のお役目をそのまま意識してきたように感じています。医療局長としての最初の仕事は新病院での医師業務の標準化でした。これは医療現場を安定させて医療事故を回避するという観点からも、何より優先する課題と思われましたので、設立準備室からの協議結果を高知医療センター医師業務マニュアルとして纏めました。必要に迫られての作業ではありましたが、振り返って、やはり作っておいてよかったと思っております。その後、副院長を命ぜられ、医療の質指標の算出・公表、学会ポスターの院内常設掲示、そして年間優秀職員の表彰制度などを提案しましたが、いずれも「評価されるべき仕事を評価しよう」とするもので、職場風土として今後も続けていただければと願っています。

地域医療センター長という職も医療局長に引けをとらない重さを感じました。本院は維持透析機能を持たないなど、当初から地域医療機関との連携を前提にした医療施設ですし、加えて県都中心部からは離れた地にあります。そこで患者紹介をいただくためには本院を、紹介するに足る医療レベルの病院であると信頼していただくことが何より肝要と考え、“医師目線での病院紹介誌”として「にじ」の発行を始めました。その後、同職は後任に譲り、ITセンター長として電子カルテ公開システム「くじらネット」の立ち

上げ等にも携わることになりましたが、堀見前病院長から「にじ」の編集長だけは続けるよう指示され、今日に至っています。

一方で臨床医としては思い残しが多くございます。糖尿病診療につきましては地域の先生方に、医療センターとチームとなつての診療をご提案させていただき、平成21年から県内7か所で始めた小グループでの勉強会は、これまで延べ500人超の先生方のご参加をいただきました。しかし糖尿病合併症の1日ドックとして立ち上げた「糖尿病ピットイン外来」、そして院内電子カルテ情報をより活用しやすく開発したソフト「i Catch-up」の2つは、まだ想定ほどの稼働をしておりません。地域の皆さまに於かれましては、私の退職後も同サービスの活用とお引き立てを賜ればと存じます。

振り返って高知医大から高知女子大学、さらに1年の中央病院勤務を経て参加させていただいた高知医療センターは、私が人生で最も長く在籍した職場であり、それ故か最も思い入れの強い職場となりました。その高知医療センターを愛する者の一人として、本院が今後もますます発展し、高知の医療を支える存在であり続けることを心より願うものであります。そして皆さまには開院以来、様々なご支援をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。

ペインクリニック科

文責：ペインクリニック科 科長 青野 寛



渡邊 麻奈美

ペインクリニック科科長
青野 寛

穴山 玲子

私が県立中央病院のペインクリニック外来から引き続き、医療センターの開院と同時に、3階の30番診察室でペインクリニック外来を初めて10年目が過ぎようとしています。

最初は外来も週に3回、午前中だけで、他に麻酔科医として手術室での仕事もしておりましたが、患者さんの数が増え、1年後には週に5日、毎日外来をするペインクリニック外来の専従医となりました。

神経ブロックの減少

患者さんの数も多い時には1日40人を超え、平成18年度には外来で行う神経ブロックの中でも代表的な「硬膜外ブロック」は年間1013件、「星状神経節ブロック」は774件となりました。そのような状態が数年続いたのち、平成24年度は患者さんの数は1日平均25～30人程度、「硬膜外ブロック」は年間320件、「星状神経節ブロック」は年間14件と、他の神経ブロックの数と同様に件数は減少傾向になりました。この神経ブロックの減少傾向には、この10年の痛み治療に関する2つの傾向が関係しています。

一つ目は、いくつかの新しい鎮痛薬が使えるようになったことです。従来の鎮痛薬に加えて、リリカ®、トラムセット®、サイ

ンバルタ®などの新しい鎮痛薬が登場し、これまでの鎮痛薬で対応できなかった痛みのコントロールが可能になってきたのです。また、癌性疼痛の患者さんのみに処方できていた「医療用麻薬」も腰痛などの癌性疼痛以外の患者さんにも処方できるようになり、難治性の痛みの軽減に効果をあげています。

二つ目はエコーを使った神経ブロックが増えてきたことです。今まで、ある程度熟練を要していた「星状神経節ブロック」やX線を用いた「透視下での神経ブロック」もエコーを使えばより安全に神経ブロックを行うことができるようになり、エコーを使った神経ブロックは平成24年度には242件と増えてきました。

おわりに

当科には頭痛、腰痛、癌の痛みから原因不明の痛みまでさまざまな痛みを抱える患者さんが来られます。前述のような新しい薬や神経ブロックを使用しても、痛みはそれだけでは軽快しません。たとえば腰痛の治療であれば神経ブロックや薬の内服に加えて、整形的な治療であるリハビリや体操、生活習慣の改善なども不可欠です。そのために整形外科の医師とも連携して、治療をおこなっています。その他にも社会的な要因が痛み

に関係しておれば心療内科などの医師とも連携も必要で、どのような痛みであっても、他の診療科と連携して診ることを心がけています。

これからも、日常生活で苦しむ患者さんの痛みを改善するために、治療を行っていくつもりです。そして、痛みをとる、改善することを専門にする医者を育てることも大切な使命と思い、日々外来へ出ています。

病理診断科

文責：病理診断科 科長 岩田 純

はじめに

病理部門の業務は、組織診、細胞診、病理解剖がその三本柱となります。2005年3月に高知医療センターが開院して以来のそれぞれの件数は別表のとおりで、大きな変動こそないものの、組織診は漸増傾向にあります。また、多数の臨床科が存在する当院の実状を反映して、提出される検体や疾患の種類は多岐にわたり、業務の質および量は高知県内のトップクラスです。全国的に病理医の不足が問題となっている昨今ですが、当院では幸いにも開

院時に2名の常勤病理専門医が確保され、その後、多少の増減や交代を経つつも、やはり2名の常勤病理専門医(岩田純、松本学)を擁して現在に至っています。その他、2名の非常勤病理医、1名の専修医がおり、滞りなく業務を遂行できています。学会関係では、日本病理学会認定施設、日本臨床細胞学会認定施設、日本臨床細胞学会教育研修施設に認定されています。



	2005※	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
組織診 (迅速組織診)	4,478 (269)	5,296 (414)	5,480 (404)	5,176 (347)	5,787 (345)	6,496 (398)	6,206 (385)	5,970 (393)	6,302 (388)	6,309 (379)
細胞診 (迅速細胞診)	5,417 (71)	6,068 (73)	6,687 (47)	6,014 (19)	6,156 (29)	6,393 (17)	5,567 (19)	5,001 (8)	5,173 (3)	5,030 (5)
病理解剖	19	20	17	18	12	18	11	7	15	8

※2005年(3月-12月)のデータ

おわりに

病理業務に従事しているのは、もちろん医師だけではありません。7名の臨床検査技師(うち細胞検査師2名)と1名の事務担当職員がおり、皆が重要な役割を担ってくれています。高知医療センターで病理業務を行っている部署は、医療局の科名でいえば病理診断科になるのですが、決して医療局に限定されるものではなく、部局横断的な

一つのチームといえます。日進月歩の臨床診断・治療レベルに合わせた病理診断法の導入と拡充、病理医や技師の能力・技術の継承などが今後の課題ですが、がんセンターの整備が計画されつつあることとも併せ、病理部門のあり方にも検討の余地があると考えています。

皮膚科

文責：皮膚科 科長 高野 浩章

10年の実績など



浦田 知宏

皮膚科科長
高野 浩章

中須賀 彩香

高知医療センター内外の医療に関わるすべての皆さまをはじめ多くの方々に、これまで皮膚科をご支援いただき感謝いたします。高知医療センターも開院10周年を迎えました。

2005年3月当時の高知中央病院皮膚科と高知市民病院皮膚科が統合され、開院以来、高知医療センター皮膚科を現在まで2人体制でやってまいりました。

井上利之→古北一泰→鉄谷真由→中須賀彩香(現在)の各先生たちと共に、皮膚科一般診療、皮膚外科の一部をはじめ皮膚に関わる全般的な診療を続けてまいりました。さらにこれまでに多くの研修医の方々が皮膚科研修に来られ、新旧医師共に刺激を受けあってきました。非常に人手のかかる広範囲の皮膚処置や手術では大きな力になっていただき助かっています。このことは現在も進行中です。

現在日本皮膚科学会研修指定施設に認定されています。また日本皮膚科学会において乾癬治療の生物学的製剤使用承認施設にも認定されています。

皮膚科の各種実績等をまとめてみました。

各種実績

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
外来患者延数	5540	6160	5981	5562	5834	7342	8043	8551	8638
外来患者実数	3953	4421	3997	4108	4340	5353	5780	6123	6311
光線治療外来数		290	344	262	281	261	242	217	209
他院からの紹介	242	271	224	219	222	267	359	295	349
院内紹介	1552	1383	1296	1303	1356	1507	1393	1349	1262
入院患者数	59	93	80	58	54	59	40	56	56
平均在院日数	25.5	16	10.5	16.1	18.4	17.4	16.1	14.9	12.7

処置関連数

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
手術数	95	105	87	107	90	127	91	115	131
皮膚生検数	83	76	78	139	125	123	154	140	154
冷凍凝固数	310	468	368	266	308	412	422	535	483
光線療法数	571	725	832	749	775	653	775	996	873



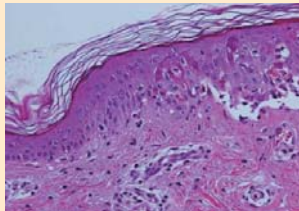
図：UV7001K 全身型(タワー型) ナローバンドUVB紫外線照射装置

外来を当初の一診制から二診性に変更したこともあり、開院以来外来患者数も増えてきています。他院からの外来紹介数もここ3年で年300-350名程度です。特筆すべき

点として、入院・外来をあわせた院内紹介患者数は年1300-1500名程度にも及んでいます。



本科では、未だに日々、新しい発見があります。皮膚科のおもしろさとは症例を通して学び続けることができること、自分の目で皮疹の形態を確認できること、比較的皮膚生検を行いやすく診断につなげやすいこと。皮膚科とは実におもしろい学問である？



症例を2例だけ紹介しますと；
1例目はTEN型薬疹です。全身の皮膚が剥離しました(写真左)。皮膚病理(写真右)で表皮細胞の壊死を確認し、治癒に1ヶ月かかりました。



2例目は、打撲後に急速に皮下膿瘍が拡大進展したケースです。穿刺吸引にて多量の膿汁が排泄された壊死性筋膜炎で、切開、デブリードマン、そして植皮術と、治癒に1ヶ月かかりました。

今後とも、一例一例の治療の決着をつけるような、治療の道筋をつけていける、手助けをできる医療者でありたいと常に肝に銘じています。



10年の歩みで感じたこと

統合して一番顕著になったのは、急を要する疾患が圧倒的に増えたことです。

統合前の病院では1年に1例みるかどうかの症例が、実際には意外に多かったということです。壊死性筋膜炎、ガス壊疽、重症薬疹、全身熱傷、横紋筋融解症などです。

救急医からの依頼も多かった印象がありますし、皮膚科から救急医はじめ他科の医師に治療の依頼をすることも多くありました。これからも同様の流れになると思います。当然のことながら皮膚科の対象とする疾患はアトピー性皮膚炎をはじめとする湿疹・皮膚炎群、細菌・真菌・ウイルス感染症、良性・悪性皮膚腫瘍、自己免疫性水疱症、角化性炎症疾患、などなど多岐にわたっています。その他褥瘡チームを組んでの回診、抗がん剤の皮膚障害の治療やス

キンケアの啓蒙など多岐にわたっています。

院外での皮膚科医のつながりも密にあり、四十数年来の伝統がある高知皮膚科医会(高知大学皮膚科、病院勤務医、開業医で構成)で近況、症例報告、勉強会などが高頻度に行われ積極的に参加し、情報交換を行っています。顔の見える関係ができており、頼もしい限りです。特殊な治療やより精査を要する症例などに関しては、高知大学病院にも紹介させていただいたりしています。

知識がないこと、学ばないことは恥だとの思いで、勉強会、研究会に可能な限り参加し、新しいことを吸収したいと考えています。若い先生方が立派な医師に成長できるようにサポートするとともに、自身も成長していきたい思いです。

今後の展望から夢を語る

特別な治療がすばらしいのではなく、基本的な治療を着実にこなせるかどうか大切であると考えています。皮膚疾患の種類が今後、大きく変わるとは思えません。しかし過去の治療、処置が今では時代遅れになっていることもあります。傷処置には必ず消毒薬が必要であった時代が、現在ではとにかく消毒より洗浄をへと変化してきています。高齢化社会になり、介護力の問題などもあり、十分にケアが

できないために生じる皮膚の変化なども増えてくると思われれます。皮膚科がどこまでお役に立てるか、これからも考え続けていきたい。そして今後とも皆さまに質の高い、こころのこもった医療を施すことができるように努力していきたいと考えています。今後ともご協力の程、よろしくお願いたします。

月	日	曜	高知医療センター イベント情報 3月～			
3月	3	火	第12回総合診療科セミナー （参加費無料・事前申込不要）			
			内容	造血器腫瘍 ～代表的疾患とその治療～	場所	高知医療センター 1F 研修室
			時間	18:00～19:00	対象	医療関係者
			講師	関西医科大学付属 滝井病院 血液腫瘍内科 石井 一慶 氏		
	お問い合わせ：高知医療センター 総合診療科 上村 由樹 TEL:088(837)3000					
	6	金	第17回高知県癌疼痛治療・薬物療法研究会 （参加費500円(お弁当代込み)・事前申込不要）			
			内容	がん診療拠点病院と 在宅を繋げるための緩和ケア	場所	ホテル日航高知旭口イナル 2F あげぼの
			時間	18:45～	対象	医療・福祉関係者、一般
			講師	神戸大学附属病院緩和支援診療科 神戸大学大学院医学研究科 先端緩和医療学分野 特命教授 木澤 義之 氏		
	お問い合わせ：高知医療センター 緩和ケア内科 科長 原 一平 TEL:088(837)3000					
	7	土	平成26年度 高知呼吸器カンファレンス （参加費無料）			
			内容	I：「症例から学ぶ③」症例提示 II：「特別講演」肺がんCT検診の現状と今後	場所	高知医療センター 2F くらしおホール
			時間	16:30～18:30	対象	医療関係者
			講師	I: 1. 高知医療センター 呼吸器外科・2. 同 呼吸器内科 / II: JA長野厚生連 小諸厚生総合病院 放射線科部長 臨床画像センター長 丸山 雄一郎 氏		
	お問い合わせ：高知医療センター 呼吸器外科 岡本 卓 TEL:088(837)3000					
7	土	第36回地域医療連携研修会 （参加費無料・事前申込不要）				
		内容	乳がんの手術療法 ～最近の進歩(再建術について)～	場所	高知医療センター 2F くらしおホール	
		時間	13:30～15:00	対象	医療関係者、一般	
		講師	講師1: 高知医療センター 形成外科科長 原田 浩史 氏 / 講師2: 高知医療センター 乳腺・甲状腺外科科長 高島 大典 氏			
お問い合わせ：高知医療センター 地域医療連携室 井上・早瀬 TEL:088(837)3000						
13	金	褥瘡対策勉強会 （参加費無料・事前申込不要）				
		内容	「創傷管理(創傷治癒の基礎から、足潰瘍・褥瘡について)」 ～創傷被覆材の解説と適応など～	場所	高知医療センター 1F 研修室 (1・2・3)	
		時間	18:00～19:30	対象	医療関係者	
		講師	徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 形成外科教授 橋本 一郎 氏 ※にじ2月号の掲載内容において、誤りがありましたので訂正してお詫び申し上げます。(誤)朗→(正)郎			
お問い合わせ：高知医療センター 褥瘡防止委員会 恒石 TEL:088(837)3000						
15	日	高新・高知医療センターがんセミナー2014 （参加費要・事前申込要）				
		内容	「緩和ケアの役割とは」	場所	高新文化教室 (RKC 高知放送南館3階 37号室)	
		時間	10:30～12:00	対象	一般 (定員:40名)	
		講師	高知医療センター 緩和ケア内科 科長 原 一平 氏			
お問い合わせ：高新文化教室 088(825)4322 (受講料9,850円/全12回、1,500円/1回)						

※時間等、変更になる場合もございますのでご了承ください。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

編集後記

本院が設立された平成17年の秋に発行しました創刊号からこの第113号まで、ひたすら本誌の編集に携わらせていただきました。当初は全くの手探り状態で、掲載にふさわしい記事が毎月集められるのか不安があり、まずは4ページで、とも考えましたが、より積極的に、という思いから思い切って8ページで始め、今日に至っています。“地域医療連携”誌というこのユニークな広報誌が今後どのように発展してゆくか、これからは皆さまと同じく、読者の立場で楽しませていただこうと考えています。これまでお読みいただき、誠にありがとうございました。(深田順一)



平成27年3月1日発行
にじ 3月号 (第113号)
毎月発行
編集者：深田 順一
発行者：武田 明雄
印刷：株式会社高陽堂印刷

発行元：
高知県・高知市病院企業団立
高知医療センター
〒781-8555 高知県高知市池2125-1
TEL：088(837)3000(代)

広報誌「にじ」に関するご要望・ご意見をお寄せください。renkei@khsc.or.jp